

マタイによる福音書 25 章 14-30 節 「忠実な、良いしもべ」

1A 僕の身分 15-18

1B 主人の召し 14-15

1C 命令の遵守

2C 主人の財産

2B 忠実であること 16-18

1C 主にある成果

2C 「小さなこと」

2A 主人の帰り 19-23

1B 遅く見える時 19

2B 主に任される大きな事 20-23

3B 他に要らない報酬

3A 無駄に終わる人生 24-30

1B 神に関わらない人生 24-25

2B 豊かにされる者と、取り上げられる者 26-30

本文

マタイによる福音書 25 章を開いてください、14 節から 30 節までにある、有名な喩えである「タラントの話」を読みます。マタイ 25 章 21 節にあるイエス様の言葉、「良い、忠実なしもべだ。」ということを見ていきます。主が戻って来られる時まで、私たちが何を基準に、何を動機付けにして生きていくべきなのを見ていきます。

本文の喩えは、イエス様が、ご自分が再び来られる、終わりの日のことを話している中で、話しておられます。その前には、思慮深い僕と愚かな僕の話をしており、主人が戻ってきた時に忠実に食事を与えているのを見られることを願っておられます。イエス様が戻ってこられる時に、ご自身に従う者たちが忠実に、言いつけられたことをしているかどうか試される、ということです。その後、十人の乙女の喩えがあります。ここでは、婚姻において花婿が来る時に、その行列に付いていくのですが、灯を用意します。その灯に必要な油を用意した五人の賢い娘がいる一方で、用意していなかった愚かな娘が五人いて、愚かな娘は油を買っている間に、花婿の家に入ることができなかった、という教訓です。主が戻って来られることに、用意をしているのかどうか？です。

1A 僕の身分 15-18

そしてタラントの喩えです。ここでも、主人が戻ってきた時にどのように評価されるのかが、問われています。その時に試されるのが、主に対する忠実さということです。

1B 主人の召し 14-15

ところで私たちは、イエス・キリストの福音を信じることによって、神に仕える生活に入ります。それは、神を信じる生活そのものであり、生活の全てについて神に聞き、神から語られたことを行っていく生活です。そこで、大事な教理、教えがあります。「召し」ということです。「ローマ 8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」私たちは信じる時に、神と主イエス・キリストに従うという選択と決断をしました。けれども、神から見れば、それは「呼んだ」ということに他なりません。神がご自分の家族の中に入れるために、召し入れたということです。

私たちは自分で選んだ道を歩むというように捉えますが、それも一面ではその通りなのですが、それよりも、神ご自身が私たちをキリスト者になるべく選んでくださり、召し入れてくださったということのほうが正しいのです。いかがですか、皆さんが、自分がなぜキリストへの信仰を持っているのか、どのように説明するでしょうか？時に、自分がなぜ信じているのか、不思議にならないことはないでしょうか？それは、信じるという行為すら、神の主権の中で行われたことを表しています。イエス様が弟子たちに言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。(ヨハネ 15:16)」

1C 命令の遵守

したがって、私たちの生活は、選ばれて、召されたところの生活です。主体は神であり、主イエス・キリストです。私たちに権利があるのではなく、主人に従う生活に変えられました。キリストは、初めに私たちに仕えてくださり、ご自分の命を身代金にするほどまで仕えてくださいました。そのへりくだった方が、私たちに軽い頸木を載せて、私たちはこの方から学び、そして仕えるのです。使徒ペテロは第二の手紙で、「1:10 あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。」と言いました。召されたこと、選ばれたことを確かなものとしていくのが、私たちの生活であり人生です。私たちは、個人的に神に召されただけでなく、キリストの体の一部になるように召されました。したがって、教会生活というのも、自分の選びや好みではなく、「神に言われたから」という一つの理由だけで成り立つものです。

私は毎年、アメリカで宣教会議に出席します。世界中の宣教師が一同に会するのですが、なぜ、この人がそんな国に行っているのかといぶかるような話を聞きます。どうしても、いかにもアメリカ人的な若者が、西洋文化とはかけ離れたまるで違うところにいるのか？唯一、「主に命じられ、召されて、他国に、他文化の中に入って福音を伝える。」ということなのです。自分がどうこうということではなく、福音を語らざるをえない、しかも世界に出て行って語らざるを得ないという、務めを果たす情熱に突き動かされています。私も、初めて教会に行った時は、宣教師がいました。初めは心の中で蔑み、見下していました。「キリスト教は侵略する宗教だ。高慢な奴らだ」という思いがあ

りました。けれども、自分自身が抑鬱になり、そして高慢な人間だと気づき、悔い改めました。信仰をもって改めて、なぜ彼らが来ているのか？と思いました。母国での快適な生活を捨てて、なぜわざわざ？と思いました。それで分かりました、「キリストがそうさせているのだ、彼らの心を動かしているのだ」と。主に言われたから、という理由だけで動くのです。

みなさんの中には、どれだけ「神に言われたから」という意識があるでしょうか？礼拝に集っているのは、神に召されているからという確信があるでしょうか？自分のしている奉仕、兄弟姉妹との交わり、その他の活動において、どれだけ「神に言われたから」という理由だけで動いているでしょうか？自分の信仰の素養に必要だから、という自分の選択や好みを基にしているでしょうか？また、自分の仕事や家庭、また趣味が中心で、追加として礼拝生活を考えているでしょうか？けれども、それでは豊かな霊的生活を楽しむことはできません。主人である神に呼び出されたのだ、という意識と確信に満たされる必要があります。自分はいくまでも僕であり、主に忠実になることが全てであるという意識が必要なのです。そこに、聖霊の導きがあり、その力を受けることができます。

2C 主人の財産

そこで、14-15 節を読んでみます。14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。

僕として生きるということは、いかにも窮屈に思えます。けれども、その意識は間違いです。むしろ、すべての被造物をご自分の財産としている神ご自身に仕えることは、とても楽であり、恵まれています。ここで、「自分の財産を預け」という言葉が大事です。自分の財産を使って、会社で働くということはありませんね。提供される仕事着があります。また、机もあり、その他、会社の提供するものによって働きます。会社ではなく、例えば兵役だったらどうでしょう？その命令は絶対です、けれども自分がすべきことははっきりしており、後はすべて国が提供してくれるのです。

もし、自分が主体で生きていこうとするならば、そのために必要なことも自分自身ですべて用意しなければいけません。主からの財産ではなく、自分の財産を使って行わなければいけないのです。これは大変なことです。どのようにして、愛をもって互いに仕えることができるでしょうか？自分の能力や性格の強さは、罪人の集まりという現実の前に打ち砕かれてしまいます。自分の優しさや寛容がいかにかっぽけなもので、また自分がいかに醜い存在であるかを見せつけられます。人間の愛が枯渇する時に、初めて神の愛が聖霊によって心に注がれます。

そして、「おのおの」という言葉も大事ですね。それぞれが、神から自分に与えられた行程があります。他の人が何をしているかということではなく、他の人に合わせているのではなく、主が自分で語られたことがはっきりして、それを行なうことに集中するのです。そして、それぞれが五タラ

ント、二タラント、一タラントというように、異なる賜物が与えられています。聖霊は、それぞれ異なる賜物を私たちに与えておられます。賜物また能力という言葉を知ると、「いかに自分が用いられるか」という、自分の可能性を考えてしまいます。いいえ、もう一度いいますが、その能力そのものも聖霊なる神が授けてくださるものです。すべて「借り物」なのです。

それから、「旅に出かけた。」とあります。これは、イエス様が天に昇られて、神の右の座に着いておられることを示しています。戻ってくるまでは、「もうひとりの助け主」であられる聖霊を、父なる神と共に遣わしてくださいませ。それまでは、イエス様を目にすることはありません。聖霊によってイエス様は私たちと共におられるのですが、けれども終わりの日に顔と顔を合わせて会うまでは、この方を肉眼で見ることができないのです。

ここで大切なのは、「信仰」です。信仰と希望と愛は、いつまでも残りますが、信じるというのは難しいことです。私たちは、終わりまではっきりと見ることができれば、どれほど楽なことでしょうか？ もっぱら、神が言われたことを信じて、また神が良い方であることを信じて、人生の中で立ちほだかる障害物に対して、耐え忍んで待つのです。しばしば、私たちは信仰生活を占いとさほど変わらないように考えてしまいます。こうした徴がなければ、私は前に進まないと決めてしまっているのです。信仰は、目に見えないからこそ、徴と呼ばれるものがないからこそ、発揮されるものです。主が、こちらに行きなさいという語りかけや、印は確かに与えてくださいますが、その後どうなるかはただ信じるだけなのです。

2B 忠実であること 16-18

16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

1C 主にある成果

戻ってきた主人は、ここで五タラントもうけた者にも、二タラントもうけた者にも、等しく「よくやった。良い忠実なしもべだ。」とほめておられます。その成果は、五タラントと二タラントという違いはあるのですが、元々がそれぞれ五タラント、二タラントと異なっていたのですから、主人としてはどちら

も同じような成果をあげています。

使徒パウロは、「1コリント 4:1-2 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」と言いました。私たちは、主から任された者を管理する管理者です。管理者に必要なのは、自分で何かを生み出すことではなく、いかに任されたことを忠実に成し遂げるかということです。主に命じられて、任されたことをしっかりと行い、耐え忍び、最後まで走ることが私たちに問われています。つまり、結果に責任を負っていません。主から命じられたことを行っていること、神のみこころを行なうことが私たちの満足であり、私たちの全てです。私たちは結果や目に見えるものによって、左右されてしまいます。成果が見られないと、あたかも自分に何か欠けたことがないか、原因はなにかと探して、自分たちが結果を出さなければいけないと焦るのです。しかし、主は、それはすべて神のなさることであるとして、ゆっくりしなさいと命じられるのです。

忠実な神のしもべとして、モーセがいます。彼は、何百万人ものイスラエルの民をエジプトから連れ出し、エジプト軍を海の中で殺し、無事に約束の地まで導く偉業を成し遂げました、と言いたいところですが、彼のしたことは何だったのでしょうか？「主が命じられた。それでモーセは行った。」という言い回しが出エジプト記等に何度も出てきます。彼の行なったことと言えば、主の命じられたことをそのまま実行することでした。それは、持っていた杖を上へ挙げることでした。また、主から命じられたことを民に告げ知らせることでした。エジプト人からイスラエル人を救おうとして、自分の手でしたところ、一人も救えずエジプトから逃げた彼が、主から命じられたことだけを行った時に、それだけの成果を上げることができたのです。ところが、それは主が行われたことです。モーセはしもべとして主から語られたことのみを行っていましたが、それらの御業はすべて主がもたらしたものでした。主が自分の僕としての従順と共に働き、主ご自身が事を成し遂げてくださるのです。

これが僕の姿です。モーセに必要なだったのは、「信仰と従順」でした。主から命じられることは、理解できるものではありませんでした。誰が、杖を上げたら海が分かれることを理解できるでしょうか？自分に悟りに頼らず、力を尽くして主なる神を信頼するのです。そして、命じられたことを問い質して反発するのではなく、ただ、「あなたが言われることですから。」ということで受け入れ、そのまま行きます。これだけだったのです。ですから、僕に必要なものはもう一つ、「へりくだり」です。「命じられたことだけを行っているだけです」とする、へりくだりが必要でした。ですから、自ずと主に用いられる人は、自分にその功績を持って行きません。なぜなら、行なっているのは自分ではないことを、本人がよく知っているからです。すべてが、神の恵みによることを知っているからです。使徒パウロがこう言いました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。(1コリント 15:10)」

2C 「小さなこと」

そして、主人はしもべに、「あなたは、わずかな物に忠実だったから」と言っています。小さな事に忠実であることを強調しています。主はいつも、小さな事から私たちに取り組むようにさせます。五千人の給食の奇蹟において、「あなた方の中から用意しなさい」と命じられて、アンデレが連れてきた少年が、五つのパンと二匹の魚がそうでありました。また、預言者エリヤが、パンの粉と油がもうなくなり、これで死んでしまうという寡とその息子に対して、「それでパンを作り、私に持ってきてなさい。」と言いました。そこから、パンの粉も、油もつぼから尽きることがなかったのです。小さなことを、主は大きくしてくださいませ。先ほどお話しした宣教会議ですが、宣教活動において宣教の働きの支援金は、裕福な人が多額の金額を出すことによってではなく、少額であっても捧げる忠実な人がいるので、それで成り立っています。いつの間にか、主が必要を備えてくださるのです。

私たちは目に見えること、人目に付くことをしようとします。けれども、イエス様がいつも目に留めておられるのは、小さな事柄に対して、信仰を働かせ、愛によって行うその忠実さです。イエス様は、貧しいやもめが、生活費をすべて叩いて捧げた献金のほうが、あり余った中から捧げる大金よりも、はるかに価値があると認められました。そして、イエス様の生涯そのものが、小さな事でした。この方は宇宙を造られた神の独り子です。けれども、神はヤコブの家という、力なき弱い家族を増やしてくださいませ、それを愛し、選ばれました。そしてイエス様は、貧しいユダヤ人家庭の中で生まれ、ガリラヤ地方という田舎で活動されました。確かにたくさんの方が、各地からイエス様のところに来ましたが、イエス様のところに残ったのは、復活して昇天された後は、屋上の前に百二十人の弟子が祈っていただけでした。もちろん各地に信じていた人たちはいたでしょうが、それでも大能の神の御子は、百二十人という弟子たちの祈りから、聖霊を注がれたのです。

けれども、人の評価ではなく、主ご自身の評価を私たちは気にします。4章 1-2 節を先ほど読みましたが、その続き、3 節から 5 節までを読みます。「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」評価はもっぱら、主から来ます。その間、他の人々の評価や判定が来ます。けれども、パウロのように、忠実な管理人はそのことは非常に小さなこととしているのです。けれども、私たちは自分自身に対して、また他の人のことについて、早まった判定をしてしまいがちです。けれども、主が再臨の時に判定してくださるのです。

2A 主人の帰り 19-23

1B 遅く見える時 19

さて、19 節には「さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て」とあります。主人が帰

ってくるのは遅いと感じていたのだらうと思います。けれども、耐え忍んで待っていました。主が再臨されるのは、遅れることは決してありませんが、遅く感じることはあります。そのことを既に、初代教会の中で人々は経験していました。それで、ペテロ第二の手紙 3 章で、主がすぐに来られるという希望を放棄した者たちの言葉が載っています。「2ペテロ 3:3-4 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」この世界は終わりの日だと言って、何も変わっていないではないかと言ってあざけています。ここのタラントの話の前に、イエス様は弟子たちに、忠実な僕の話をしていました。悪い僕について、「主人はまだまだ帰るまい(マタイ 24:48)」と思って、それで仲間を打ち叩いているとあります。主と日々交わり、主の来臨を待ち望む姿勢は、私たちが聖く保ちます。そして、ペテロ第二 3 章では、遅れているように見える主の心が書いてあります。「3:8-9 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」主は、忍耐深い方です。それで、約束を遅らせることはありませんが、人々が悔い改めることを望んで、待つておられるのです。

私たちは、人の世界で生きている中で、罪や不正、不条理、愛が冷えた姿、無関心など、いろいろなものを見せられて、自分自身が躓きそうになります。預言者ハバククが、ユダで行われている不正を見て、どうして何もされないのですかと訴えました。しかし、耐え忍んで待ると主は言われます。「ハバクク 2:3-4 もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」忍耐して信じる者が、神から正しいと認められます。

2B 主に任される大きな事 20-23

そして、主人は僕に、「たくさんの物を任せよう」と言ってくれました。これが、使徒たちの教えの中にある「神の相続人」ということです。「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。(ガラテヤ 3:29)」もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。(ローマ 8:17)」主が再び来られたら、その御国において私たちはキリストと共に王となり、祭司となります。そしてちょうどイスラエルの十二部族が土地の相続割り当てが与えられたように、私たちにも与えられます。このように、私たちが、神の相続人、キリストとの共同相続人であるということは、世界にあるすべてのものの相続人だということです。

なかなか遅々として進まない、バビロンからの帰還ユダヤ人による神殿再建について、主がハ

ガイを通して彼らを励まされました。「2:7-8 わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。銀はわたしのもの。金もわたしのもの。・・万軍の主の御告げ。・・」全ての金、全ての銀は主のものです。昔、木村清松という伝道者がいました。彼がアメリカのナイアガラの滝の見物に言ったとき、米国人から「こんな大きな滝は日本にはないでしょう」といわれたのに対して、「ナイアガラの滝は、俺のお父さんが創ったのだ。」と語ったそうです。これが地方の新聞に載り、「この日本人はナイアガラの持ち主である」と書かれました。そのことで有名になり、「ナイアガラの持ち主の息子」の講演会をアメリカ各地で行なったという話があります。主がハガイを通して言われた通りです。

主が戻って来られる前にも、主に忠実な者は、その小さな事柄に忠実なので、その影響力を増し加えてくださいます。初めは小さいと思われるものであっても、主に語られている、命じられているという理由だけで留まっているならば、主がそれを大きくしてくださり、多くのものを治めるようになります。これが、奉仕の姿です。今、与えられているところで主に仕えてください。そして、何か大きなものがあると思っても、自分がどこに召されているか確かめてください。そこから離れないでください。成果が見えないかもしれません。不毛に感じる時さえあるでしょう。けれども、主が次に「こちらに行きなさい」と言われるまで、拙速に動かないでください。主が増やしてくださり、大きくしてください、たくさんものを任せてくださいます。

3B 他に要らない報酬

このように、僕は主人を喜ばすことが本望です。そして、主人には全てのものがあり、私たちはその分け前に預かります。これが、正しい奉仕をする動機付けとなります。主に仕える時に、必ずしも人から喜ばれる訳ではありません。人の批評を気にするならば、いろいろなことができなくなってしまいます。しかし、主に喜ばれ、主が褒美を与えることを知れば、私たちは主の命じられたことのみ集中することができます。しばしばマスコミの問題として、その広告主である会社、スポンサーがあるので、スポンサーの意向に反するようなことは言えないという話がありますね。けれども、もらっていなかったら自由に報道できるわけです。私たちも同じです。報酬が主からであることを知れば、人を恐れずにしなければいけないことをすることができます。

3A 無駄に終わる人生 24-30

ここまでが、主の召しに応じた僕たちの姿を見ました。次に、一タラントを受け取って、その財産について何もしなかった僕がどうなったかを見たいと思います。

1B 神に関わらない人生 24-25

24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』

私たちの人生というのは、神からの呼びかけ、召しに応えるものであるということをお話ししました。しかし、世において全ての人が神に応答するわけではありません。神やイエス様ということに、無関係に生きることを選ぶ人たちも、残念ながら大勢います。今、主が戻って来られるまでは、「恵みの時(2コリント 6:2)」と呼ばれます。それは、イエス様が言われたように、「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。(マタイ 5:45)」主は、ご自分の恵みを注いでおられます。ヤコブは言いました、「1:17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。」

信仰を持っている人も、持っていない人も、だれもが神からの恩恵に預かっています。全ての善の源が神なのですから、人が人として生きるには、この方に感謝し、あがめ、この方に信頼して生きることです。ところが、多くの人がその賜物を当たり前のものであるかのようにして、自分は自分で生きる、神とかキリストとかいうものは、私は要らないとして生きていきます。そのようにして、思いが暗くなり、自分のやりたいことが偶像となり、その中でがんじがらめとなって出られないという、檻に入れられた状態になっています。「ローマ 1:21 というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」それで、神から与えられた人生というもので、神に対する応答をすることを一顧だにしません。大患難の時に、主は天使を遣わして宣言させます。「また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。『神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。』(黙示 14:6-7)」人間の根本の罪は、タラント、すなわち与えられた命、タラントに対して、それを神に対して用いようとする決断を一切しない、ということです。

僕の言い訳を読みますと、「主人が酷い方だから」というものです。彼は、神は自分から取っていく人だと思い込んでいました。真実はその逆です。神が全てのものを恵んでくださっているのです。けれども、神やキリストを信じる、自分を明け渡す、捧げるということを話すと、それは自分のものを神が取り上げると恐れるのです。これこそが悪魔が、人に吹き込んだ最大の嘘です。主が、善悪の知識の木からの実を取って食べてはならないと言われましたが、それは神のかたちに造られた人と、神ご自身との境界線を示すものでした。人は被造物を支配することにおいて、神の似姿に造られたものでした。しかし神ではありません。神に善悪の判断を仰ぎ、神こそが正しい方であり、この方に拠り頼み、この方に信頼し、従うことによるのみ、他の被造物に対して力を持っているのです。ところが、その境界線を「神が意地悪をしていて、あなたが神のようになって、善悪を知るようになるようにならないようにしているのだ。」と、神があなたを抑えつけて、自分だけが権威をふるまおうとしていると中傷しています。神と対等になることなどできないし、まさに神と対等となろうとするのは、自分が神のようになろうとしていることに他なりません。これが悪魔の陥った高慢の罪ですし、その罪の中に人をも引きずり込もうとしているのです。

また、自分に与えられている恵みに感謝するのではなく、人との比較によって妬み、神に対して苦みを持っているかもしれません。五タラント預けられた者、二タラント預けられた者を見て、自分が一タラントしか預けられていない、と考えたのでしょう。それなのに、主人は、私たちに多くのもうけをせよと言っている。そりゃ、五タラントもうけた奴のほうがもうけるに決まっているのに、主人は、一タラントから多くの金額を絞り出そうとされているのかと考えたのです。しかし、これも間違いでした。二タラントもうけた者も、五タラントもうけた者も、同じように「よくやった。良い忠実なしもべだ。」という同じ評価を受けているのです。神を受け入れない人生は、基準を他の人に持って行くしかありません。それで五タラント、二タラントと他の人と比べて、嫉んでいるのです。

それから、「こわくなり」と言っています。これが恵みの神を受け入れない者が、神を見る時の印象です。恐れるのです。「ヘブル 10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」イエスを主として生きようとする時、私たちは何か悪いことが起こるのではないかと恐れます。けれども、この方こそが最善を知っておられると信じて、捧げます。ですから信じれば、神から義の賜物を受け取ります。正しい者しか受け取ることのできない祝福を、恵みによって私たちにも与えられます。けれども、恐れれば、神から退いて、それで滅びるしかありません。

2B 豊かにされる者と、取り上げられる者 26-30

26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。』

主人は、ここで僕の言葉を取り上げています。「私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。」というのは、主人がそういう人間ということではなく、彼がそう思っているのです。けれども、これは言い訳です。銀行に預けるという方法があるではないかと主人は言っています。ここには、第一に主人に対する恐れがあります。恐れがあるので、第二に、とにかく関わりたくないと思いました。そして第三に、怠惰があります。主人が言うように、主人がたとえ搾取するような無慈悲な人間だったとしても、その中で自分の人生の中で神に応答することはできたではないか、ということです。もったきちんと考えたら、何らかの方法が見つかったはずです。

第一の恐れについては、もう既に話しました。第二の関わりたくないという思いについて、これは私たちの生きている社会に蔓延している罪です。面倒くさいことになるから関わりたくない、と思うのです。イエス様を主として生きていくことは、いろいろな厄介なことが起こるでしょう。しかし、主が必ず自分の信仰の応答に対して、報いを与えてくださると信じます。それで、いろいろなことが起こりますが、それが恵みの証しになっていきます。けれども、自分の生活に余計なものが入らないでくれ、私は私でやりたいことがあるのだと思うと、こうなってしまいます。それから第三の怠惰も、社会に蔓延し、危険です。「箴言 19:24 なまけ者は手を皿に差し入れても、それを口に持って

いこうとしない。」これが怠け者を風刺したソロモンの言葉ですが、私たちには、思い、知性、力など、神から備えられています。神に仕える、イエス様に仕えるとは、恵みに応答することであり、そこには私たちの頭を使って、力も使って、心も使います。ところが、全てが受動的であり、ほとんど考えることなしに、時間を過ごします。これが、今の社会に蔓延していますね。無気力です。教会にこれが押し寄せると、サルデスのようになります。「黙示 3:1-2 わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。目をさませ。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」

28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』

ここの主人の待遇は、厳しいように見えます。けれども、この僕の願っていること、その意志を尊重しているがゆえ、タラントを取り上げたのです。彼が、主人の与えるタラントに関わりたくないのですから、彼から取り上げたのです。これが神のなされることです。神に、イエス様に関わりたくない人は、関わらせないようにしていただきます。つまり、神から離れるままにされます。神は愛してやまない方ですから、いろいろな介入をその人生に行われますが、それでもお断りするのであれば、神はその人をご自分が全く関わらないところに送るしかありません。そうです、地獄です。地獄は、悔い改めて、神に立ち返りたいと願っている人を無理やり引きずり出して、投げ入れるところではありません。自分の人生の中で、神だけはごめんだ、要りませんと拒む人々が、その望むところに行く所であります。

29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。

これは、平等主義が身につけている今の社会にとっては、酷いことのように聞こえるかもしれませんが、まるで金持ちがますます金持ちになり、貧乏はますます貧しくされるというように聞こえてしまいます。けれども、そうではありません。神の恵みを恵みとして受け取る人々には、惜しみなく恵みを注いでくださいます。その実が三十倍、六十倍、百倍へと増えます。けれども、それらの恵みを恵みとして受け取らない、その源である神に感謝しないのであれば、源から離れているのですから、自ずとその恵みそのものも無くなってきます。水道口のそばにいる人と、水道から出た水だけを飲んでいて、水道口のところに行かない人の違いです。神の良き賜物だけは受けているのですが、神だけは要らないという人は、神なしの世界だけでなく、神の下さる良き賜物もなくなる世界の中に入ってしまう。

ここで話しているのは、物質的なことではありません。慈善行為において、キリスト者は富んだ者でなければいけませんね。欠けている人に分け与えるのは、キリスト者の責務です。けれども、そういう物質的なことではなく、霊的なことを話しています。私たちは霊的な事柄について、平等主

義になることはできません。神は恵みを注ぐ器をお立てになります。そして、恵みをその器を通してお流しになります。そして、器を通して、その立てられている器に神の選びを認めます。そうして、自分自身がイエス様につながります。イエス様と共にいることによって、今度は自分が神の恵みを押し流す者となっていきます。ある人が他の人より多く祝福されるということは、神の国においては当たり前のように起こります。そして、他の人たちは、そのことをむしろ共に喜んで、その人を祝福します。「なぜ、私たちは祝福されないのか」と言っても、妬んではいけません。これは、非常に悪い平等主義です。主は、人を選ばれて、その人に油を注いで、それでご自分の国を広げます。預言者に油が注がれました。祭司に注がれました。そして、終わりの日にはイエス様を選ばれた者、キリスト、油注がれた者としてくださいました。日本の人たちは、「神は信じられるが、なぜイエス様を信じるのか分からない。」という質問を持っていますが、それは、「神が恵みを与えられる時に、選ばれた者を通して行なうのだ。この方があなたが神につながる仲介者だし、この方があなたの生活を支配する王なのだ。」ということをお教える必要がありますね。

30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ざしりするのです。

「役に立たぬしもべ」ということは、非常に不名誉なことですね。けれども、これは自分に与えられた恵みを無駄にするということです。その人は、「外の暗やみ」に追い出されます。これは、光である神とキリストがおられるところから、離れているということです。新しいエルサレムには、神の都があります。その住民は太陽を見ません。なぜなら、神ご自身が光であられ、キリストが光であられるからです。そこから追い出されています。そして、「泣いて歯ざしりする」というのは、自分の失ったものに気づいた者たちの強い怒りの反応です。自己中心な心が、自分の思い通りにならなかった時の反応です。決して悔い改めているのではなく、後悔はしていますが、自分の心の王座に自分が居られなくなったことへの怒りと苦々しさを言い表しているものです。

ですから、ここのタラントの喩え話は、単に教会での奉仕をもっと一生懸命にやりなさいというような表面的な内容のものではありません。まだ信仰を持っていない人も含む、全ての人に対する主ご自身の問いかけです。主イエスは、主人が遠い国の旅から戻って来るように、再び戻られます。その時に、一人一人の行ないに対する報いを与えられます。使徒パウロは、まだイエス様を聞いたこともないギリシヤのアテネの人々に、次のように語りかけました。「使徒 17:30-31 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」神は、イエス様を死者の中から甦らせました。これは、この方が全ての生きている者の主であることを示しています。ですから、この方において神は世界を裁かれます。既にイエス様を知っている人々は、この方に命じられること、召されていることにしっかり応答しましょう。まだイエス様を知らない方は、ぜひこの方の名を呼び求めてください、イエス様、私を自己中心から救ってください、罪を赦してくださいとお祈りください。